

## 葉っぱのあかちゃん

ちしきのぼけっと

平野隆久 写真・文 岩崎書店



陽がさんさんと降り注ぐ冬の寒い朝、雑木林を歩いてみましょう。葉っぱをすっかり落として裸になった木々。でも枝先をよく見ると、ぷっくりふくらんだ冬芽を見ることができます。冬芽は、葉っぱの卵です。冬の寒さを乗り越えるために、あたたかそうな綿毛につつまれたり、うろこにおおわれたり。

冬の間しっかり守られてきた葉っぱの卵は、春の訪れを聞くと、ちいさなちいさな葉っぱを開き始めます。赤ちゃんが、その小さな手をそっと広げるように、まだほんのちびっこの葉っぱです。春になっても時には霜が降りてぐっと寒くなるときがあり

ます。だから綿毛を身にまとっているちびっこ葉っぱもあるそうです。

私は今まで何年も生きてきたのに、そんな葉っぱの赤ちゃんに気づいたことはありませんでした。それに気づかせてくれたのがこの『葉っぱのあかちゃん』です。冬芽の外皮を突き破って手を広げるそのしぐさに、子どもが赤ちゃんだったときのことを思い出して、胸がキュッとなりました。今年こそは、気をつけて葉っぱの赤ちゃんに「おはよう、生まれて良かったね！」と声をかけたいと思います。

『葉っぱのあかちゃん』に出てくる木の紹介が、本の最後にあります。木となかよしになるには格好の手引書です。でも、本に出てこない木の葉っぱのあかちゃんはどんな姿をしているのか・・・それを調べるのも楽しみです。